
赤色遊戯

紫媛

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤色遊戯

【Nコード】

N7404J

【作者名】

紫媛

【あらすじ】

赤の包埋に続く、「眼球」がテーマの第二作。

赤に白に黒。たった一つの空間における、目の眩みそうな色彩の主張をお楽しみ下さいませ。

目を開けると白い世界が広がってゐた。見慣れない、白。覚醒し切らない脳が状況判断を拒むため動作は停止したままだ。

「おはよう。」

鼓膜を振動させるその声の主は、最愛の人。声のする方へ顔を動かし貴方の姿を捉えようと試みる。ふと感じる違和感。腕を延ばせど貴方の身体に触れることができない。まだ寝ぼけているのだらうか。そういえばここは何処なのか。何故こんなにも白ひ。あなたに触れたいのに何故触れることが適わなひ。混乱する。兎にも角にもこの部屋から出やう。布団を薙ぎ払い上半身を起こそうとしたが、縫い留められた。

「こつちを見て。」

私の動揺する瞳はあなたの漆黒の瞳に搦め捕られる。

「何でしょうか、これは。」

ちやぷん

「」

声にならない声、声帯を震わせれるほどの空気を押し出せない。瞼の上から眼球に触れる。左右非対称な感触。口はだらし無く半開きのままで、視線は宙をさ迷う。白痴美、とはこういった表情を指し示す言葉なのだろう。

「貴女のその美しい瞳を永久に自分のものにしておきたくて。」

鼓膜を揺らす貴方の聲にうっとり目細める。もう貴方ってば仕様のない人ね。

ぐるり

硝子壘に閉じ込められた左目がこちらを向いた。新たな生を受けられた球体は私の替わりに永遠を彷徨うのだらう。酸化してゆくばかりの私を嘲笑うかのような私の視線が命を吸収する。

「貴方が望むなら何だって差し出します。」

薬指の欠けた左手が虚空を手招き、貴方がその手首にキスを落とす。なんて貴方は忠実なのだらうか。そして、黒に映る私はなんて美しいのだらうか。

窓の無い此の空間に陽光は届かない。小鳥の囀りよりも安寧を体現する貴方の声。

ゆるゆると、真綿で首を絞められるように、私は生きてゐる。欲望の流れ着く先に貴方は居るのでせうか。

覆いかぶさる貴方の重み。貴方の匂い。がりっ

喉仏に犬歯を食い込ませると甲状軟骨の弾力ある歯ごたえに、奥底がクツクツ笑いを漏らした。ぎょろりと上へ片方しかない眼球を向けると同じ笑いをした貴方と目が合った。すうと細められた目がさも愉しそくに私の行動を観察してゐる。蝶々の羽を筆り取り地面に放置して、その後蟻に牽こずられてゆく様を看取るような純粹で残忍な笑みだと思ふ。そう、現に噛み付いている今でさえ搾取る側は私ではないのだ。貴方は決して私の鼓動を止めようとはしない。末端から少しずつ間引くように私を削り取ってゆくだけ。

「ちょうだい」

たった一言。その一言が出会ったときから貴方に言えずにゐる。愛してる、ではなく、ちょうだい。

ああ。私はあまりにも深くまで愛されすぎてしまった。故に愛を告げる時間が消失してしまった。双方向の愛、それは愛と呼べるものではないでせう。仮にそれを愛と仮定するならば、私達は新しい言葉を探さねばなりません。色で示すならば、黒。全てが混じり合った先、此の色は全てを内包してゐる。私の眼前で妖しく蠢く二つの眼球の色。だから貴方はこんなにも私を搾取し続けるのですね。私の赤色の瞳でさえ吸収し、あんなにも禍禍しいと罵られた血液の色でさえ、貴方の漆黒の前では貴方をより一層高める以外の意味を持たない。そのなんと心地良いことか。私の赤が内部を透かすものであったなら、貴方の黒は裏側を透かしているのでせう。人間は自ら

の内部が露呈することを極端に懼れ、その結果、私を忌避しきげずんだ。服を着て、髪を整え、化粧で素顔を隠し、脳内で選別した言葉を喋る。そうやって皆が必死になって守ってきたものを、私の此の瞳が此の目を見た全ての人たちに知らしめる。所詮全ては血塗られた赤に等しいと。隠蔽し着飾ることで確立し続けてきた自己の崩壊に怯えるかわいそうな人間達。けれど貴方は違う。私が根源としての赤ならば、貴方は終末としての黒。人間は懼れ敬う。自己という存在を遥かに超越した懐の深さに安堵し、其処に溶け込むことで生という苦痛からの脱却に希望を抱いて。

ウ　ワアアアア

わらいながら探られる眼窩。

「いたひいたひ」

涙腺からは涙が実に正直に分泌されている。

「いたひいたひ」

白い包帯に染みてゆくのは涙だけではないのでせうね。

「澱んでゐる。それすら貴女なら美しい。」

貴女の体内から逸脱し酸化してゆく赤に、己を見出した。一人の人間の中に斯くも明瞭に原始と終焉が存在することが嬉しくて堪らない。アシンメトリの造形美。誰も理解らなくて良いのだ。己一人だけが理解できる、其れが重要なのである。

齧り付かれた喉が欲してゐる。もっと、もっと。

次は何を奪ってあげようか。何を差し出してくれるのか。

嗚咽を漏らす貴女の口を、己の舌で閉塞する。

軋むベッド。

いたひじゃあないか

愉快だよ。貴女は本当に。

己が終わらせてくれない事に気が付き、どうにかして己から快樂に満ちた末期を引き出さうとしてくる。しつこい程の模倣的搾取にほ

だされさうだなあ、25回に一度程のペースで。現在の舌噛みはすこしオイタが過ぎますよお。

んー!!!!!!

貴方の掌が私の氣道を圧迫する。せき止められた氣體が出口を求め喉が破裂しそうだ。けれども其処に死は見込めない。頸動脈はドクドクと脈打ち頭蓋内へ血液を運んでゆく。虚しい拍動。

淋しいわ、貴方

縫るような眼差しが己の肌に突き刺さる。もともと血を流せ。泣き喚け。そして己に還ってこい。黒に堕ちてしまえ。殺して欲しいか？己に殺して欲しいか？

どろり、隠しきれない闇が貴方の眼球から落ちてきた。もう終わらせて。還らせて。貴方を取り込めないならば、もう…

首から手を離す。途端に咳込む。生理的に滲んだ涙。上から降り注ぐ冷たい視線。

慈母の微笑みを湛える貴女。

そうか…赤に堕ちたのは己だったのか。

逃げられないのだよ。己も貴女も。世間は二人を逃してはくれなひ。

「この部屋が赤と黒に染まったならば出て行こうか。」
「答なら知ってゐる癖に。」

欠けていない方の掌を重ね合わせ、指を絡める。以前よりも明らかに低下した握力では傷を付けることは叶わない。

「又来るよ。」

髪を梳いて、私に何も遺すことなく貴方は部屋を出て行ってしまった。

追い掛ける方法など当の昔に私から剥奪されゐる。

愛に代わる言の葉を搜しておきませう。貴方の温もりが消失する前に。きっと此の部屋の何処かに舞つてゐるでせう。死に逝く直前の朱に染まって。

シュルリ

私の血を余すところなく吸い込んだ包帯を解き手にとる。大嫌いで大好きな、赤。ぎゅっと握り締めて壁に擦り付けた。

赤とも黒ともつかない色に嘔吐した。室内は胃酸のつんとした臭いに支配され、私はもう一度吐いた。

（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございます。感想・批判等何なりとお申し付けください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7404j/>

赤色遊戯

2010年10月21日22時17分発行